



《記録》台湾校友会・盧中庸元会長に聞く

― 専修大学時代、卒業後、そして台湾校友会について ―

生い立ちと来日まで

私は、台湾南部の台南県東山郷（現台湾市東山区）に一九二六年一月二九日に生まれました。その頃の東山郷はほとんど農家ばかりの田舎町で、私の家も農家でした。今では若者たちも都会への憧れ

を持ち、台北や高雄などの大きな町に出ていきますが、昔はとても保守的な村で、あまり外に出ていく人もいません。とくに国外に出る人は非常に珍しく、村から日本に留学したのは私と私の兄、そして妹だけでした。

父が亡くなったのは五歳の時です。その後は母が一人で農業をしながら私達を育ててくれました。

兄・私・弟・そして妹三人の六人兄弟。そのうち三人も日本へ留学させてくれたのです。

日本に渡ったのは昭和一五年、地元の小学校を卒業してすぐのことです。当時、台湾の小学校は八歳で入学して、一三歳で卒業します。私は一四歳の夏休みに来日して、明治大学附属中学校の編入試験を受けて合格し、一年生の二期からの編入となりました。

私が小学校の頃、台湾は日本の統治下にあったため、学歴も日本と同じで四月に入学して、三月に卒業でしたが、当時、台湾の田舎の小学校と日本の小学校では教育のレベルがすごく違っていました。日本の中学校の教育についていけるかが不安だったことを覚えています。

明治大学附属中学校を選んだ理由はいくつかありますが、中学校の場所が駿河台下にあったことが一番大きかったです。当時、兄が三崎町にある日本大学経済学部に在学中だったので、お互いを見届

けることができました。しかも神田付近には多くの大学があり、将来、大学に進学する際にも便利だと思えました。そのほかにも古書店や出版社も多く日本の文学の中心地でもあり、交通の面でも便利な所というのも理由の一つです。

台湾で小学校の先生になるためには師範学校を卒業する必要があります。師範学校に行けるのは相応の家庭であって、それだけでエリートと言えます。

台湾の中学校の修業年限は五年ですが私立は非常に少ない。公立の中学校では入学試験を行います。優秀な成績の学生が集まるような学校では生徒の約五〇%が台湾在住の日本人でした。そして残りの五〇%が台湾人。しかしその五〇%の台湾人もかなり裕福な家庭で、さらに台湾政府と繋がりのある家の子供でないと、その中に入ることもできません。私は台湾の中でそういう人たちと競争するよりも日本に行つて、日本の学校に入る方が良くと考えていました。

ましてや日本の中学校を卒業すると、台湾の中学校を卒業するより良い資格がもらえます。就職する際も日本の学校を出ている場合と台湾の学校を出ている場合では差があります。日本が台湾に対して植民地政策を行っていたからです。留学には多くのメリットがありました。

四年生から六年生までの担任だった中島先生は、私が小学校を卒業する時、どこの学校に進学する予定なのかと心配して尋ねてくれ

ました。私はあまり台湾の学校に進学するつもりはなかったのですが、先生は台南師範学校を受けなさいと言ってくれました。お話ししたように師範学校の数は非常に少なく、当時の台南州には台南師範学校の一枚しかない。つまり非常に狭き門だったわけです。

私は台南師範学校を受けて、その狭き門をくぐり抜け、合格したにもかかわらず、先に東京に行つて日本の大学で学んでいた兄が台湾で勉強するより東京で勉強しなさいといふので、師範学校には行かず、東京に行きました。やはり兄も保守的な田舎の村にいては私の将来のために良くないと考えていたようで、一緒に連れて行くかと考えていたようです。

師範学校に行かなかつたのにはもう一つ理由があります。師範学校を卒業すると、小学校の先生にならなければならないという義務がありました。私はあまり学校の先生になりたいと思わなかつたからです。

日本には従兄と一緒に来ました。当時、従兄は小学校の代用教員をやっていたのですが、彼も機会があれば代用教員を辞めて留学したいと考えており、ちょうど私が留学することになったので一緒に日本で勉強することになりました。しかし勤めていた小学校がなかなか従兄を辞めさせてくれない。というのもあの頃、台湾の小学校は教員が足らない状況でした。そのため代用教員を多く雇っていたわけで、結局、従兄は小学校に辞職願も出さずにこっそりと来日しました。

明治大学附属中学校から専修大学へ

日本に来てからは、兄と一緒に池袋のアパートに住みました。その後このアパートに妹もやって来て、妹もここから豊島区の小学校に通いました。中学校時代も専修大学時代もこのアパートにずっと住んでいたのです、日本にいる間はずっと池袋で暮らしたことになります。当時の池袋は駅も小さく、今のように発展した町ではありませんでした。

兄弟二人、そして後に妹を含めて三人が日本で勉強するのは金的にも大変で、最初は母からの仕送りで暮らしていたのですが、母は大変苦労したと思います。母の恩と偉大さはいつも頭に置いています。

私は明治大学附属中学校に通っていた頃から、せっかく日本に留学したので卒業後は大学に行こうと思っていました。当時、日本の中学校も台湾と同様に修業年限は五年でしたが、戦時下のため繰り上げ卒業となり、四年生の時に卒業。私は政治学や経済学を学びたいと考えていたのですが、当時、明治大学には政治学や経済学を同時に、かつ専門的に学べる学部がありませんでした。そこで政治と経済を同時に学べる学校を探した結果、専修大学を選びました。どの大学に行きたいというより学びたい学部に入ることが最優先だったので。兄が通っていた日本大学への進学はあまり考えませんでした。

そして昭和一九年、専修大学専門部政経科に入学。試験があった

ことは覚えていますが、内容は忘れてしまいました。明治大学附属中学校から専修大学に行ったのは私一人で、やはりそのまま明治大学に進学した同級生が大多数でした。

専修大学の専門部政経科は私の入った年に設立された学科で、二、三年後には法科になったような気がします。昼間部に入学したのですが、同級生はかなりの人数がいて、教室内には人があふれかえていました。

当時の思い出と言えば、総長であった小泉嘉章先生のご自宅に二、三回訪問させていただいたことで、詳しい場所は忘れましたが、先生の家は中野駅より先に行ったところで中央線の南側にあったかと思えます。私はいつも一人でお宅を訪問しました。

私は小学校時代からよく学校の先生のお家にお邪魔してました。とくに小学校時代の恩師である中島先生には大変お世話になりました。先生は戦後、日本に戻って島根県大田市にお住まいになりましたが、私が小学校時代の先生の宿舎は私の家と学校の中間にあつて、歩いて三分ぐらいの場所でした。そのため放課後は先生の宿舎周辺の掃除によく行きました。中島先生は私が日本へ留学する際も、一人で東京まで行けるのかと、すごく心配してくれたほどです。

小泉先生も私を部屋まであげて、気さくにお話ししてくれました。当時、先生のお宅を訪問する学生は少なかったし、私は先生を親のように思っていたので、先生も私を子供のようにかわいがって

くれたのだと思います。

戦時下での学生生活

昭和一九年入学ということで、在学当時から戦争の問題はありましたが、台湾でも満二〇歳以上にならないと徴兵の対象にはならないし、一五歳で来日した私には少なくとも徴兵はないだろうと思っていました。しかし小学校に入った頃から戦争中ということもあってお国のためという教育は受けており、使命感のようなものは持っていました。航空兵の学校に入ろうと思っていたぐらいです。小学校を出れば少年航空兵になることもできたし、そのための学校もありました。ただしその学校を出た多くの若者は特攻兵になりました。幸いにも兄も当時は日本大学に通っていたので、徴兵はされませんでした。

専修大学では軍事教練もやりましたし、勤労動員にも行きました。勤労動員が始まったのは二年生の時で、誰がどこに行くのかは学校の差配で、自分で希望できたわけではありません。私は北千住あたりにあった紡績会社に行かされました。紡績会社といっても織物は織っておらずに航空機のパーツを作っていました。そのほか月島の造船所にも行きました。勤労動員は軍務のため授業よりも優先されていました。

専修大学では戦時中も英語を教えていましたが、先生はあまり元気がなかったように思います。敵性語であったため、教室から出て

行く学生もいました。そして英語という授業自体のコマ数もだんだん減っていききました。

学内の雰囲気としては、日本人だから、台湾人だからという区別はそれほどなかったし、みんな一緒に仲も良かったです。留学生の数は、台湾人よりも韓国人の方が多くいました。

池袋と学校を往復していただけだったということもありますが、私自身は他大学の学生との繋がりはあまりありませんでした。留学生同士で同じアパートに住んでいた学生もいましたが、私は兄弟で暮らしていたためそうした留学生同士の繋がりもあまりなかったです。

通学は、池袋から神保町までを走る都電を使っていました。あの頃の電車は速度が非常に遅く、一時間半ぐらいかかったことを覚えています。だから急いでいる時は国鉄を使って、学校から飯田橋まで出て、新宿を経由して池袋まで帰りました。兄は三崎町にある日本大学経済学部だったので、同じ路線を使っていました。私と登校する時間が違っていたので一緒に通学はしませんでした。

池袋のアパートは、大家さんが台湾出身の兄の友人夫婦で、台湾人だけでなく日本人も多く住んでいました。大きなアパートでした。家賃は忘れてしまいましたが、ほとんど自炊していたので無駄遣いもしていません。

お昼は、食糧難で配給制であったため弁当も作ることができず、食券を持って近くの配給食堂に食べに行っていました。近隣の大学

生も来ていましたが、食券を持っていない学生もいて、ざるそばぐらいしか食べられない者もいたほどです。

いつもお腹が空いているとか、ご飯が食べられないというわけではなかったのですが、量的な満足を得ることはできませんでした。

食券には甲乙丙という三種類があったのですが、甲は一般の人、乙は会社員や学生、丙は労働者という風に分けられていたので、量も決められていたのです。

大学の授業は真面目に聞いていました。しかし学者になるつもりはなかったので哲学の時間とドイツ語と日本語や漢文の時間は在学中にやっていた商売のために使いました。日本語については、小学校時代から日本人の先生に教えてもらっていたし、テストは毎回九〇点以上取っていました。昔から日本人より上手でした。だから先生もかわいがってくれたのだと思います。漢文は台湾にいた時、夜、漢文塾に三年間通いました。自分の人格や精神は自分で養うことができると思っていたので、自分にとってあまり重要でない科目の時間は商売をしに外へ出掛けます。でも自分に必要な政治や経済は一生懸命勉強しました。

勉強してない科目の試験がある時は、中野に住んでいた同級生の中村さんからノートを借りてほとんど寝ないで一週間で勉強していました。いつも朝六時にはご飯を炊いていたのですが、勉強に集中し過ぎてご飯を焦がしてしまったこともあります。ご飯を食べたらずぐ片付けをして学校に行く。一時間半ぐらい電車に乗って学校

に着いたら午後二時か三時まで試験。終わって家に帰って二時間だけ寝る。そして起きたらまた勉強する。その繰り返しでした。試験は落第生にならない程度の成績でしたが。

終戦後の学内事情

終戦直前、そして戦後の話をすると、昭和二〇年八月まで授業は行われていました。空襲があつて都内の交通機関が打撃を受けても、復旧したらずくに学生は通学してきました。勤労働員の際は現場に直行するのですが、戦争の最後の頃になるとだんだんと勤労働員が増えていったような気がします。しかし日本全体がそういう雰囲気になつていたし、私自身もそういうものだと思っていました。

終戦後は休講もなく、すぐに学校は再開し、私も再開したらずくに学校に通いました。勉強するために日本に来たという理由もあるし、当時は勉強しないと試験にも通らなかつたからです。といって再開直後の混乱期ということもあつて、勉強する時間も少なかつたため試験は形式的なものではありませんでした。

私自身は、戦争が終わつたことで、やつと勉強ができるという思いが強かつたです。日本に来た時は、旅行バックなどなかつた時代だったので、柳行李に荷物を入れて、それをロープで身体にくくりつけてやつてきました。柳行李には自分で「男子立志出郷家、学若無成不回郷」という言葉を書きました。それぐらい強い思いで日本にやつて来たのです。

在学中に始めた商売

戦前と戦後では学内の雰囲気は大分変わったような気がします。台湾や韓国から日本にやって来た留学生たちは戦争が悪化するにつれて、仕送りを送ることも受けることもできなくなってしまいました。電報送金などができなくなったためです。理由としては船が台湾や韓国に行く途中でアメリカの潜水艦などから攻撃を受けてしまったためでした。

当時、台湾行きの船は神戸から出ていました。だいたい四泊五日ぐらいで台湾に着くのですが、来日して一年後に妹を連れてくるために台湾に帰った時は、船一隻では帰れず、船団を組んで前後左右に軍船、上空は飛行機で船を守るという状況下での帰国でした。船は神戸を出て、下関海峡を通過して、九州と韓国の間を通り、中国の沿岸、上海沖を通過して、台湾沖まで行き、金門島から台湾海峡に入ります。このようにアメリカの潜水艦を避けながらの航海だったので

す。仕送りが途絶えていた時期はどうしていたかという点、先ほどもちょっと話しましたが、実は私は戦時中から兄と一緒に自分で商売をやっていました。当時、煙草は配給制で一人一日五本とか一週間に何本とかというように決まっており、隣組長が配給していました。だから兵隊さんなどは煙草を貰っても、一本一本をポケットに入れてしまい潰してしまう。そこで私の兄は、友人に頼んで煙草のケースとパイプ、時計のバンドなどを作って、これ売る商売を始

めました。

金物は当時、大変貴重で軍が管理していました。なのでジェラルミンの切れっ端なんかをプレス機にかけて煙草ケースを作って、それを卸すという商売を始めたのです。馬喰町に子供が兵隊に行っている人で住んでいたおばあさんがいました。彼女は自宅で煙草を売っており、私はそこで喫煙具を買っていたため親しくなりました。そこでその家の二階を貸してもらって、そこをオフィスにしたのです。

兄が企画して私が販売する。商売を始めてからはお金に困ることはありませんでした。

あの当時の学生はみな角帽に学ランでしたが、私は角帽でも学ランでもなく、学校に行く時は大学の徽章を付けた戦闘帽でした。そして商売に行く時は戦闘帽を被って、国民服姿になりました。あまり子供っぽい格好をしていくと、盗んだもの売りになりました。あまってしまうからです。私は煙草屋や時計屋に直接、商品の配達に行きました。当時はそうした商品を運ぼうにも輸送手段がなく、自分で運ぶしか方法がなかったからです。

でも自分で配達することは顧客に対するサービスにもなります。お客さんも喜ぶし、その場で注文が来たらすぐ持つて来ることができます。千葉や船橋あたり、東京市内を回りました。そういう学生は当時、専修大学にはいなかったと思います。

商品を作っていたのは小さな町工場でした。どういう商品を作る

かは兄が考えます。例えばベークライトの煙草入れには蓋に絵を入れていました。そのほかジュラルミンで作っているものにはすべて彫刻を施していました。ジュラルミンに彫刻するととても綺麗な線や絵が出てきます。もっと高級なものとしては透明のアクリルで作ったケース。蝶番や金物はみんな金メッキを施して高級感を出しました。おそらく今売っても高級品だとみんなが思ってくれるのではないのでしょうか。

学生の片手間の商売ではなく、本格的な仕事でした。今だったら退学になっているかも知れません。この商売は終戦後も行っていました。戦後は戦後で物資難であったためやはり売れました。

元三菱銀行頭取・田実渉氏との出会い

商売で儲けたお金は三菱銀行押上支店に口座を開設して預けていました。当時の押上支店長は、戦後、神戸支店長、大阪支店長を経て、本社に戻って頭取にもなった田実渉（一九〇二・一九八二）さんでした。田実さんと私たち兄弟との付き合いはこの時から始まりました。

戦後、台湾に帰っても、私は日本で商売をしていたので、月に一回、多い時は月に二、三回来日していました。その時はいつも三菱銀行の頭取室に、台湾から来ましたと挨拶の電話をしていました。頭取室に電話をすると当然、秘書が最初に出ます。当初、秘書の方は私の名前を言ってもなかなか取り次いでくれない。頭取は忙しく

時間が無いと言われてしまう。たまたまそのやりとりの途中で頭取が来たらしく、台湾の盧さんからだと秘書が言うのと、すぐ繋いでと言ってくれた。それからはずぐに秘書の方も繋いでくれるようになりました。

ある時、東京プリンスホテルに泊まっていたら、一〇時頃、読売新聞社の部長をやっていた友達が部屋にやって来ました。部屋から田実さんに電話をした時、友達が君は頭取と知り合いなのかと聞いてきたので、友達だと答えました。頭取から午後一時半なら会えるので来てくれと言われた話をすると、友達から普通、頭取に会うためには一ヶ月前にアポイントをとらなくちゃならない。すぐ電話して会えるなんておかしいと言うから、君も来たらと誘いました。友達も三菱銀行本店の入口まで一緒に来たのですが、エレベーターのところまで秘書が迎えに来てくれましたので、信用して結局中には入りませんでした。

田実さんは私が台湾に帰る時も、大きな真珠のカフスポタンとネクタイピンのセットをくれました。これは戦争中、別荘に置いてあったもので、幸いにも戦火を免れたので、記念にあげますと言われた。新宿の中華料理店で食事をした時のことでした。

そのほかにもこんなエピソードがあります。田実さんが押上支店長時代に腸チフスにかかってしまいました。当時、腸チフスの薬はなかなか手に入らない。しかし私の兄は京橋に本社があった三共製薬の社長と友達でした。兄はその社長に頼んで腸チフスの薬を分け

てもらい、それを田実さんに渡したのです。田実さんはそのことをずっと覚えていたようで、その後、彼が三菱銀行の頭取を経て、会長になった時に、『文藝春秋』にインタビュー記事が掲載されました。そこに私の命は台湾の盧さんが助けてくれたと書いてあります。

卒業後、台湾に帰国

商売中心の学生生活を送りながらも昭和二三年に無事、専修大学を卒業しました。私は当初、卒業後も台湾に帰るつもりはなかったのですが、兄が一度台湾に帰りなさいと言うので帰ることにしました。それでも私自身は帰ってくるつもりだったので、家具や荷物などすべてを借りていたアパートにそのまま置いてきました。というのも戦後、台湾人はなかなか外国に出ることができなかったからです。蒋介石が徴兵制を敷いたため、一度は兵隊にならないと外国に行けなかったというのがありますし、共産党と戦争するため、若者を確保しなければならず出国が禁止され、留学しようとしてもできなかったという理由もあります。

そこでアパートの管理は同じアパートに住んでいた台湾出身の友人にお願いした。家賃は私が三菱銀行の池袋支店に口座を持っていたので、その口座から引き落として払ってもらっていました。ところが、彼が寒い時期に使っていた電気毛布が原因で、私の部屋だけが火事になってしまいました。専修大学時代のもの、卒業証書や写

真などは全部この時に燃えてしまいました。

台湾に帰ってから一年間は台湾島中を靴一つで歩き回りました。私は田舎出身で、自分が育った本場に小さな農村しか知らず、しかも小学校卒業後すぐに来日したため、台湾の都会がどのようなもので、どこにあるかすら知りませんでした。最初は大きな市を、次に小さい県や郡など、島中くまなく見て回りました。海岸線や山も幸いにも日本で稼いだお金が十分ありましたので、これから台湾で商売するためにはまず台湾を知る事が必要だと考えたのです。

本格的に商売を始める

一年間の台湾漫遊後、一五〇万坪の土地を買って農業を始めました。期間は五年ほどだったでしょうか。なぜ農業を始めたのかというと、あの当時、台湾はひどいインフレ状況だったからです。例えばコップを仕入れて売って、その時は三割儲かったとしても、明日はもう仕入れ値が昨日の売値の三〇%以上に値上がりしている。そんな状況でした。だから物を売るような商売はできないと考え、農業を始めたのです。

生産をお願いする人、販売をお願いする人など全部で一〇〇人以上の人を雇いました。でも当時は人件費が安くすんだので、農産物が育って収穫できれば、高く売れるだろうと考えていましたし、もし売れなくても農業をやっている分には食べる分には困らないだろう。そう思って農業をやっていました。

そうして五年ぐらい農業をやった後、台湾の国内情勢も落ち着いてきた頃に、土地を売って台北に来ました。

私は政治を学びましたが、兄も政治が好きな人でした。兄は日本大学を卒業後、妹と一緒に台湾に戻りました。当時、蒋介石が率いる国民党は各県ごとに支部を設立しており、私がまだ日本にいた頃から、兄は台南県支部の常務委員を務めていました。あの頃の国民党の書記と言えば県知事でさえも逆らえないぐらいの権威がありました。常務委員は、立場的には書記の下になりますが、兄も台湾全土の国民党の幹部たちに多くの友人や知人がおり、台湾政府上部に人脈を築いていました。

台南市の、あの頃は台南県でしたが、国民党支部に新聞社を設立しようという計画が持ち上がり、兄は新聞社の社長として経営に携わることになりました。台南県党支部の常務委員兼新聞社長になったのです。国民党の新聞社の社長だから県知事にもすぐ会える。なにしろ県知事自身が社長である兄に頭を下げていたほどです。

兄がそうした立場にいたので、私自身も党の役人に知り合いが多く、あの時、国民党の書記が私に向かってこう言いました。君は日本で学んできたのだから、どんな職業に就きたいか希望があったら言いなさい。もし学校の先生になりたいなら県政府の役人が紹介する、と。書記の力を持ってすれば、確かに知人を学校に入れることも簡単だったでしょう。もし新聞社の編集部に入りたいのであったら、編集部に席を用意するとも言ってくれた。しかし私はそうした

コネを使って仕事に就く気はなかった。なぜなら私は当時、国民党があまり好きではなかったからです。

そうした話を断って、私が始めた商売の一つが子猿を日本へ輸出するという仕事です。私は帰国後、台湾全土を一年掛けて回った。もちろん山の方も全部歩きました。そうした経験が活かされたのでしょうか。

戦後、日本にはペット用の子猿が不足していました。そこに目を付けたのです。日本の大きなペットショップはみんな私から子猿を入手しようとしたほどです。

台湾で子猿を集めることはそう簡単なことではありません。子猿は台湾の山中の高砂族地方でないと取れません。私は高砂族がふだん町へ出て物資の売買をする各町に子猿を買う店を開いて、毎日、購入した子猿を集荷して台北に送り、ある程度の量になると、検疫をちゃんと受けさせて、飛行機を使って日本に運びました。

子猿は台湾で一匹二〇元（台湾元）か三〇元で購入したものです。それが日本へ売る時は、一匹が一〇ドル（アメリカドル）になります。日本の当時のレートは一ドル三六〇円。二四元が一ドルでしたので、凄い儲けになりました。三田と日本橋と横浜に鳥獣を扱う大きな店がありました。そのほか名古屋にも大阪や神戸にもありました。ぜんぶ私の得意先です。

子猿だけでなく台湾産の特殊な小鳥や、キョンと呼ばれる台湾にいる小型の鹿、水牛なども日本に輸出しました。その頃、日本の動

物園に水牛はおらず、実は上野動物園の水牛は私が輸出したものです。当時、台湾では水牛は輸出禁止でした。なぜなら蒋介石は水牛を農業の労働力と考えていたためです。しかし私は上手に輸出許可を取りました。この水牛は老齢のため農業用の労働力としては役に立ちません。殺すのはともかわいそうだし、なにより日本の動物園が欲しがっていますという理由で、政府から許可を取り付けたのです。

台湾校友会の設立について

当初、台湾では「校友会」と呼ばず「同学連誼会」と呼んでいました。当時は蒋介石政権のもとで、思想についての取り締まりが非常に厳しかった時期で、校友会という名称だと、結社と勘違いされってしまう可能性があるのです。同学連誼会という名称にしたのです。つまり同じ学校の出身者が連なって誼を通じる会という意味です。蒋介石が亡くなった後に校友会という名称に変えました。

その発端をお話すると、一九七〇年、私の先輩である頼熾昌さん（昭和四年経済卒）から、年を取って昔のことをよく思い出さなくなった。昔の仲間を集めて親睦を深めたい、については専修大学出身者の同窓会を作りたいとの相談がありました。ただし頼さんは、高齢のため自分で組織を立ち上げるようなことはできないとのことで、林文礼（昭和一九年予科卒）さんと一緒に私のところに来てきたのが台湾校友会結成のきっかけです。

しかし当時、台湾のどこに、また何人の卒業生がいるかは全くわかっていませんでした。私自身、頼さんと林さんとは面識はなかったんですが、彼らは私が専修大学出身ということを手籍で調べてきたそうです。林さんはもともと警察にいたので、そのコネクションを利用して台湾にいる専修大学の出身者を調べたということでした。こうしてようやく台湾同学連誼会が組織され始めました。

こうした組織が作られたことは専修大学も当時まったく知らなかったようです。私は仕事の関係で、日本と台湾を行き来していたので、台湾の校友の方々に学校の徽章やベルトのバックルなどの記念品を買って帰ろうと思いい、専修大学を訪ねました。そうすると一人の女性が出てきて、そういった記念品は学生以外には売れないと言います。私は商売で欲しいわけではなく、台湾にいる校友にプレゼントしたいと思っています。みんな卒業してかなりの年月が経っているのです、こういったものが恋しくなっていると思うのですと説明しても売ってくれません。そこで当時、秘書室長であった藤上太郎先生に事情を話しました。そうしたら藤上先生が森口忠造理事長に話をしてくれました。これでようやく、そ



台湾校友会設立前の同学連誼会の校友メンバー（前列右から二番目が盧氏）

れませんでした。これでようやく、そ



れなら売っても良いということになって、藤上先生と一緒に売店に行って買うことができました。本当に台湾校友会の存在を誰も知らなかったのです。ただし発足はしたものの、台湾校友会自体にはお金もなかったもので、幹事兼財務担当として私がかかなり負担しました。

私自身も記念品を買いに行くまで、卒業後ずっと専修大学と関わりを持つことはありませんでした。森口先生は、私が記念品を買いに行つて、台湾に校友会があることを知ると、藤上先生に台湾に行つて様子を見てきなさいと言つたそうです。そこで訪台してきた藤上先生のために台湾校友会各支部は歓迎会を開きました。これで

ようやく専修大学も台湾の校友会の実状を知ることになりました。

すると森口先生は、創立百周年記念の神田校舎改築資金の募集³を台湾の校友に対してお願いするために再び藤上先生を台湾に行かせました。藤上先生は、この時、神田校舎改築募金事務局次長を務めていた大熊武夫先生と一緒にやって来ました。大熊先生は

中国にいたこともあるとかで北京語が少し話せる方でした。

この時も前回の訪台の時と同様に高雄や台中など各地の校友を召集して歓迎会を開いて、募金募集に協力しました。個人寄附は一口一万円とのことでしたが、当時、台湾に円はないので、みんなドルに換算して寄附しました。それを藤上先生がまとめて日本に持って帰りました。

募金をした後、専修大学も台湾校友会の存在を認めるようになったのか、一年に一回、総会を開催するのですが、森口理事長や校友会長も参加するようになりました⁴。

「報恩の間」の金屏風について

もう一つ、この時期の忘れられない話があります。昭和四八年一月三〇日に神田一号館の落成式が挙行され、式に参加するために台湾の校友たちも来日しました。この落成式にあわせて現在、報恩の間に設置されている金屏風を寄附したのが台湾校友会です⁵。この金屏風は台湾から飛行機で運んだもので、大きいのでとても大変でしたが、私が商売でよく使っていた航空会社だったので便宜を図ってもらえました。

なぜ、こうしたものを寄附したのかというと、以前からよく台湾に来ていた専修大学三三会（昭和三三年卒業生の会）の方々から落成記念に金屏風を作って寄附したらどうですかという打診があり、それに対して私がいいですよとお答えしたことがそのきっかけとな



台湾校友会から寄贈された金屏風。報恩の間に設置されている。

りました。

当時、私は商売の一つとして、台湾で工場に委託してお盆やお椀などの漆製品を作って、それを沖繩に輸出していました。だから金屏風を制作するのも多少なりの知識があるので大丈夫だと思ったのです。

しかし金屏風の制作は非常に手間がかかりました。金箔は台湾では作っていないので、純金製のものを日本で買って持ち帰り、台湾の職人に制作を依頼したのですが、その工程が大変でした。金箔を貼るためには、表面をきれいに磨いて桐油を塗る。その後、紙やすりで磨いて桐油を塗って、漆を塗る。こうしたことを三回以上も繰り返します。出上がるのに三ヶ月もかかりました。飛行機に乗る一日前の夜中まで作業を急ピッチで続けたおかげでようやく完成したのです。

ただし、本来乗る筈

の飛行機には搭乗できませんでした。台湾校友会のみんなは朝の飛行機に乗ったのですが、私は夕方の便で金屏風と一緒に日本に向かったのです。

これようやく落成式に間に合うと思ったら、今度は税関で引っ掛かってしまいました。金屏風を日本に持ち込むなら税金を払えというわけです。しかし私がこれは売るためではなくて専修大学への贈品なので税金を払う必要はないと突っぱねたので、すったもんだの言い合いになってしまいました。

税関職員が言うには寄附を証明するために文部省の書類が必要とこのことで、大熊先生に相談するとすぐに書類を作ってくれました。そして翌朝一緒に税関までついてきて、紆余曲折を経て落成式の前日の夕方に金屏風を専修大学に持ってくることができました。

しかしそれからが大変でした。次は組み立て作業をしなくてはなりません。私と大熊先生、そして当時はまだ若かった松木健一（現常務理事）さん、そのほか確か全部で五、六人ぐらいでやりました。すべての組み立てが終わったのが夜の二時です。さすがにお腹が減ったのでご飯を食べに行こうとしても当然ながらどのお店も閉まっています。そこで大熊先生がいつも鼻肩にしているお寿司屋さんに行きました。夜中二時に眠っていたご主人を起こしてもらって、お寿司を握っていただきました。

森口理事長への提言

専修大学は、私が卒業した昭和二三年以降、留学生の受け入れを止めていました。この件について私は日本と台湾を行き来する商売人として私なりの意見を持っていました。台湾校友会を組織したおかげで森口理事長とも色々なお話しができるようになったこともあり、大学の在り方についてもいくつか提言したことがあります。

まず私は母校である専修大学の学校の名前を海外でも売って欲しいと思っていました。そこで森口理事長に、①大学経営の基盤ともなる財政を整えること、②世界に冠たる大学となるべく留学生を入学させること、③世界の有名な大学と姉妹校として提携すること、こういった内容の話をしました。そうしたら森口理事長は私の話を理解してくれて、一七人もの台湾留学生を入学させてくれました。そしてその一年後には韓国からの留学生も受け入れてくれました。私がさらに各国から二人ぐらい留学生を採用したらどうですかと理事長に話したら、さすがにそれは教室が足りないというご返事でした。

森口理事長は毎年、定期総会に出席してくれたのですが、その他にも台湾校友会設立後は、教職員などの専修大学の関係者が訪台しにくれるようになりました。私はそうした方々が台湾に来る時は、政府に働きかけて国賓待遇にしてもらっていました。税関も一人一人でなくまとめて通過。荷物も検査を省略。空港では貴賓室を使用できるように手配し、コーヒーなども無料で出してもらいます。

もし専修大学が留学生を積極的に受け入れて、卒業後、彼らが母国に帰って高官になったら、私が今やっているようなことを専修大学関係者に対してやってくれるかも知れませんよという話を森口理事長にしました。そうしたら台湾や韓国以外の留学生を受け入れるようになってくれたのです。

これからは中国が強くなるだろうから、中国の学生も採るようにと私は言ったのですが、森口先生はそれはちよつとと言われた。それでも私は今でこそ中国は共産主義だけど、だんだん資本主義に変わっていった、最後は共産主義と資本主義の間になると思うという話もしました。そしてアジアだけでなく、北米・南米など世界から留学生を受け入れるべきだと。

今では専修大学は多くの留学生を受け入れています。私としても非常に喜ばしいことと嬉しく思います。

森口先生には本当にお世話になりました。現在、私の仕事は息子が継いでいるのですが、実は息子も専修大学の出身です。私の商売を継いでもらうためにも日本語が必要と考え日本に留学させました。来日して一年間、日本語学校で勉強した後、どこかの学校の試験を受けさせようと思っていたのですが、森口理事長からぜひ専修大学に来なさいと言われ、専修大学を受験して合格しました。親子二代で専修大学に学ぶきっかけを作ってくれたのも森口理事長の一言でした。

専修大学北海道短期大学への提言

昨夜（二〇一四年六月一三日）、田中實常務理事と松木健一常務理事とで食事をしました。その際に専修大学北海道短期大学の話が出ましたが、山下徳夫先生が理事長だった時代に当時の丸山貞雄専務理事らと三人で北海道短期大学の話をしたことがあります。

私はこんな話をしました。日本政府は毎年、農業の海外援助を行っている。山下先生は国会議員なのだから、山下先生を通して、そういった基金から補助金を貰ってはどうかと言いました。あの頃、日本と中国は今よりもっと良好な関係でした。蒙古地区や新疆地区は砂漠が多く水がない。そのため草木は育たないので農産物は採れません。だから溜め池を造って水を溜めて、それをスプリンクレーターで撒くことで牧草を育てる。さらに周囲に木を植える。そういう環境を整備してはどうかと思っていたのです。木が育つて大きくなれば水が溜まる。さらに牧草が生えれば太陽が照っても水が蒸発しない。そうすると農産物を育てることができます。

北海道短期大学は援助資金を貰ってそういう研究をすれば良いという話をしたのです。教員にも勧めたらどうですかという話を丸山専務に二時間ほど話をしたのですが、お伽話としか受け取ってもらえません。ですが、私はそういう研究をすれば日本だけでなく中国からも資金援助を貰えるのではないかと思いましたが、それによって中国からの留学生も来てくれるのではないかと思ったのです。

中国の天山地域は一年中雪が降っていて、夏になるとその雪が解けて水になって川に流れ落ちます。その水は全部捨てていました。それではもったいない。だから天山の水を新疆地区や蒙古地区まで運ぶために水路を敷設すれば良いと考えていました。こうした事業を今では中国が計画しています。

あの当時、北海道短期大学がそのプロジェクトの研究をしていたら、中国から資金援助を貰えたのではないかと今でも思います。この事業は一年や二年といった目先の仕事ではなく、百年、もしくはそれ以上かかる仕事だからです。

中山大学との姉妹校提携を仲立ちする

二〇〇六年、私が校友会総会に参加した際、当時、事務局長を務めていた野村泰三さんが今度、台湾に行きたいと思っていますという話をしました。そこで私は、歓迎しますのでいつ頃を考えていますかと聞くと、一〇月という返事でした。それならばせっかくなので、一〇月に来るというのなら、一〇月一〇日は台湾の建国記念日ですので、閲兵式や色々な行事があるから、それにあわせて訪台したらどうですか、私が台湾政府に働きかけて一行を国賓として歓迎します、と答えたところ、野村さんも賛同されましたので、私はさっそく台湾の外交部、日本で言う外務省の高官に話をしました。さらに当時の中華民国総統である陳水扁氏は台南出身で私と交誼があり、彼にも話をしました。こういう話は総統まで持って行った方が話が

早いと思ったからです。ただ台湾と日本は正式な国交がないため、亜東関係協会を通して話を進めました。

私はこのために何度か日本と台湾を行き来しました。日本では、野村事務局長を亜東関係協会の方に引き合わせ、台湾では外交部の高官だけでなく、教育部、日本で言う文科省の高官とも会って、表慶訪問団として丁重に扱ってもらうように根回しをしました。

その際に、教育部に対して、専修大学が台湾の大学と姉妹校提携を結びたいと考えているようです。どこか良い大学はありませんかと聞いてみました。すると教育部から中山大学が良いじゃないかという返事がきました。すぐに中山大学に話してみると中山大学の方からも賛同が得られました。当時、台湾政府も国立大学の強化政策を進めていたこともあって話がとんとん拍子に進んでいったのです。

専修大学が日本を代表して親善のために、台湾の建国記念日の表慶訪問団を送ったという形にしたことが、今回の提携を進めるうえで非常に良かったと思っています。ほかの大学でこのような訪問を行った大学は当時なかったからです。

台湾校友会としての活動

台湾校友会の活動としては、これまで話をしてきたように、年に一回、総会を開催していますが、そのほかにも、専修大学が台湾において留学を希望する若者に対して説明会を開催する際には、台湾

在住の校友たちが自発的に参加してパンフレットを渡して説明するなどのお手伝いもしています。高雄で開催する時は高雄支部が、台北で開催する時は台北支部が、というように各支部がお手伝いするわけです。

また、最近では研究や調査に訪れた教員、中山大学などに留学のために訪台する職員や学生も増えていきます。そうした人たちができるだけ食事などに招待して懇親会や座談会なども開催しています⁷。

以前、先生が学生を引率して台湾に来ました。学生たちは中山大学を訪問したりしたのですが、この時も彼らを食事に招待しました。その席で、先生が学生たちに対して台湾のことで何か聞きたいことがあつたら遠慮なく、盧さんに聞きなさいと言ったので、学生たちはたくさんさんの質問を私にしてみました。私も見知らぬ土地にやって来た学生は知りたいものや見たいことがたくさんあるだろうと思っていきますし、それを教えてあげるガイドが必要だと思つているので、私に答えられることはみんな教えてあげようと思つて学生と話をしました。私は台湾中を回っていたので、だいたいのは答えられることができるからです。せっかく台湾に来た若い専修大学の学生たちのために何かしてあげたいという強い気持ちでいっぱいでした。

誰のために商売をするのか

私は様々な商売をしています。その商売の一つに防水工事があり

ます。戦後、台湾で最初に防水工事を行ったのが私です。その頃は、建築士や設計士、ゼネコンも含めて誰も防水という概念すら持っていませんでした。大阪で開催されていた建材展覧会に防水材料が展示されていた。その防水材料を台湾に輸入して、防水工事を研究するようになり、台湾で工事を行うようになったのがその始まりです。政治や経済しか勉強しなかったのも、土木を新たに勉強するのは大変でした。参考になるような本も台湾にはなかったのも、日本に行った時に防水関係の書籍を買って、台湾に持って帰って勉強したほです。

台湾では左官を雇い、自分も朝、背広から作業服に着替えて、左官と一緒に泥まみれになって作業しました。台湾の鉄道の防水工事は全部私がやった仕事です。そのほかにも電力会社、石油会社、学校からもかなり多くの仕事を請け負いました。

今、台湾で防水工事を行っているのはみんな私が教えた人たちです。会社を設立した元社員もいます。約一〇万人の人がこの仕事に従事している。家族も含めると四〇万人以上の人々が私が始めた防水工事によって生計を立てていることを先駆者として非常に嬉しく思います。よく人からは仕事を盗られてしまいましたねと言われるますが、私はまったく彼らに仕事を盗られたとは思いません。それよりも自分が始めた仕事誰かの役に立っていることのほうが嬉しいという気持ちが強いです。それに私は常に新しい仕事を考えますから。

台湾に帰って最初の商売が農業だったことは最初に話しました。なぜ農業を始めたのかというと、これも先に話しましたが専修大学に通っていた時代は自炊していました。戦時中、野菜は配給制です。大根なども少ししか配給してくれませんでした。戦後になって食糧不足は変わらず、輸送方法も少なく、農村から市場へ野菜類を運ぼうにも簡単に運ぶことができませんでした。そのため市場で売られる野菜はとても高価だったのです。

しかし日本と台湾では気候に差があります。台湾の方が暖かいので収穫時期が日本より早い。そして安い。しかも台湾で野菜がたくさん採れる時期は、日本は冬で野菜が採れない。あの当時は今みたいにハウス栽培もありませんでした。ハウスを作るための材料もないし、農家自身も非常に貧しかったのでお金もなかった。だから台湾の野菜を築地市場に持って行くことで、東京の人々に安い野菜を食べてもらいたいという気持ちで商売を始めたのです。

東京が大雪、大雨、台風などに見舞われて野菜類がない時は、築地からよく私の会社に電話がかかってきました。キャベツや白菜、カリフラワーなど葉菜があれば値段はいくらでもいいから積み出してくれ。緊急に野菜類が必要のため「」(電信送金)や「」(信用状)の開設も間に合わないのの後で「」送金する。そんな悪条件でも私は必ず野菜を東京に輸出しました。私自身が東京に住んでいたこともあるし、なにより都民が困ると思ったからです。

商売をするうえで、お金を儲けることはもちろん大切なことで

す。でも私は人々も得するように、人々がきちんと生活できるように考えながらも商売をしています。社会のためになって、さらに自分も儲かる。これが私にとって商売をするうえで一番大事なことなのです。

※この記録は、平成二六年六月一日日に開催された専修大学校友会代議員会に出席するために訪日された盧中庸氏（昭和二三年専門部政経科卒）に対して、瀬戸口龍一（大学史資料課）が専修大学神田校舎において行った聞き取り調査をまとめて、盧氏にご確認いただき、そのうえで註を施したものである。

【註】

- 1 政経科は教育に関する戦時非常措置によって経済科と法科を統合してできた。このとき商科と計理科も統合され経営科が設置された。戦後の昭和二一年四月には元の形に戻された。
- 2 小泉嘉章総長の住所は、当時は東京市杉並区東荻町四〇であった。現在の杉並区荻窪三丁目あたりである。
- 3 専修大学は昭和五四年に創立百年を迎えるにあたって、神田校舎を改築するための資金を昭和四六年から四九年にかけて募集した。
- 4 『専修大学校友会史』p552に次のような記述がある。

さらに四十九年には、台湾で戦後はじめて校友会総会が開かれ、森口理事長はじめ校友会本部から藤江会長、林副会長、井上参与、松井組織部長、早川企画部長らが訪台した。

戦前、台湾からもかなりの学生が専大に学んでいた。戦後は交流がとどえていたが、神田新校舎建設によって、海を越えた募金が台湾から寄せられるようになった。一行が台湾を訪れたのは一月、台北で校友歓迎総会が開かれ、藤江会長がこれを機会に校友会の連帯を密にしてゆきたいとあいさつ、森口理事長から大学の近況を報告した。席上、神田、生田両校舎のスライドが上映されると、会場から歓声がわき、同窓生らは母校の姿を懐しげに見入っていた。このあと一行は台中、高雄を訪れ、現地の校友と懇談した。

5 『専修大学校友会史』p553に次のような記述がある。

- （昭和五十四年九月十六日）このあと十五階報恩の間で、韓国・台湾同窓歓迎会が開かれ、千葉校友会長、森口理事長、相馬総長、高橋学長からそれぞれ祝辞が述べられた。これにこたえ韓国同窓会と台湾校友会から、大学百年のお祝い金と金屏風が大学へ寄贈された。
- 6 盧杰輝氏（昭和六三年商学部卒）
- 7 平成六年三月に経営研究所と商学研究所と合同で組織された「台湾企業調査団」による調査結果をまとめた『専修大学経営研究所報 第一一〇号』（平成六年八月）には、幹事である田口冬樹先

生が書かれた次のような記事が掲載されている。

盧中庸校友会会長を始めとする役員ならびに卒業生（約八〇人）との懇談が持たれ、学部や大学院で指導を受けた多くの卒業生に再会できまたそれぞれの第一線での活躍を知り、改めて大学の国際化の重要性を実感した参加者が多かったと思える。